

## 労働における主体性

オットー・サロモン 著  
横山悦生 訳

その人自身が主体的な方法で適用したり利用したりできる知識や技能こそがその人の本当の所有物であるとみなせることはほとんど疑う余地がない。何かを学ぶことは確かによいことである。しかし、そのように学んだことを利用することを学ぶことは、無条件によりよいことである。生活の要求に役立つようにすることについて、学んだことと学んでいないこととの差は実践的であることと実践的でないこととの差ほどは重点は置かれない。多くの人には比較的かなり良い知識を持って自分の生活を歩んでいくが、その知識を適用することを理解していないので、その知識は彼自身にも他の人にも実際に役に立たない。そのような人間は非実践的であるといわれる。学校での一面的な理論的知的な教育がそのような非実践的な人間、つまり他の人が言ったり書いたり行ったりしたことを繰り返すことができるだけで、イニシアチブをとり、主体的に何かをすることができない人間を作ることには貢献しているという推測に対して確かに大きな理由がある。ちなみに「実践的な人間」という概念は日常会話においては多くの点で間違った意味で使われてきた。人は普通「実践的な人間」というものを、いわゆる実践的な職業に従事している人と理解している。それはつまり、技術的な職業、手工業、農業に従事する人などと主に理解している。そのような仕事に従事している人は一般に「実践性」にある種の特権を持っていると自分自身でみなし、他の人からもそう見なされているが、特にあれこれの学校問題に関するようなことについての意見交換の際にその人の実践的な言葉をよく使う。時折人はそうした人物が次のように話すのを聞く。「私は実践的な人間として、それがどのように実践的な方法で組織されるか、または組織されるべきかについて一番よく理解しているであろう」。しかし、その人は「実践性」という表示を正しくかあるいは間違っ得た、何らかの職業に従事していることを理由として「実践性」を誇示している。しかし、それは多くの場合まったく根拠がないことである。なぜならば、一人の人間が実践的でありうるのは一つの分野の中においてであり、他の分野においては実践的ではない。例えばどのように下水設備の場所が決められ掘削されるべきかについてとても詳しい人が、それに詳しいという理由だけである教育方法が他の教育方法よりも優先されることをその人が決定する能力があるとみなすことはできない。さらに何らかの誇張された実践性について疑う必要がないようなやり方で、いわゆる実践的な職業に従事している人々がいる一方で、多くの理論家といわれる人々が大きな実践的な能力を持っている場合もある。その説教が聴衆の心を惹き付ける牧師、よい教育を組織し教えることを理解している教師、自らの研究成果を明確な方法で述べるのできる科学者、これらのすべての人はそれぞれが自分のやり方で機械技師や大工と同じように実践的である。それゆえに実践的な人間というのは、一般的に自分が習得したことを使い適用することを知っている人であると理解されなければならない。この意味で実践的という概念は主体性の概念と緊密に結びついている。

\*\*\*

教育的スロイドが自己活動の発展のための優れた手段であることについては、ほとんど意見は一致しているであろう。優秀な教師の指導の下でスロイド活動に従事している子どもたちを観察する機会を持った人は、誰もが完全に自然な方法で次第に子どもたち自身が主体性に慣れることがわかるであろう。スロイドの実習室で習得した習慣は、生涯にわたる習慣になるためのすべての前提を備えていることについて疑う余地はない。この観察は決して子どもだけでなく、同じように大人にも当てはまる。多くの非実践的な人はスロイドをすることを通じて自らの手で解決する確かさを得る。この確かさというものがその後の彼にとって役立つことになる。特に教師にとって自信のない状態の感覚は、進歩豊かな活動にきわめて大きい損害を与えるので、合理的な基礎に従って組織されたスロイドのコースへの参加は、特にこの点で教師たちに大いに役立つ。

しかし、もしスロイドが実際にスロイドをする人に自己活動の習慣を発達させようとするならば、スロイドは自己活動を考慮して組織されなければならないことは明白なことである。というのは労働が実践的な性質をもつにもかかわらず、労働する人がともかく非実践的である、または非実践的であり続けることが容易に起こりうるからである。このような組織は、一方で労働自体の性質と関係があり、他方で労働の遂行の際のやり方と関係がある。これらの両方の点においてできるだけ多くの慎重さと専門知識をもって扱うべきである。最初の労働自体の性質という問題について、この労働が労働者の身体的及び精神的な

能力に完全に対応していなければならない。したがってその労働は一方ではやさしすぎず、他方では難しすぎず、重すぎないようにすべきである。重すぎる場合は、労働者は教師の援助なしでは与えられた課題を自分で解決することはできない。やさしすぎる場合は、個々の発達が努力を前提としているので、自己活動についての何らかの発達が得られない。いかなる発達も努力なしでは普遍的に有効ではなく、教育学的な法則が常に念頭におかれなければならない。それゆえ体系的な方法の教育学的な意義は、よく考えられた努力によって自己活動が常に要求されることにある。他の条件が満たされている時に、易しいものから難しいものへと飛躍なしに進むことを通して、判断においても遂行能力においても、教授は作業する人を確実にそして明白に次第に大きな主体性へと導く。指物スロイドの中にある練習の分析と、利用できるモデルの中にある練習の合理的な組み合わせを通して、主体性の形成が可能であることを証明してきた。それがスウェーデンの教育的スロイドのメリットである。

しかし、課せられた作業が方法的に組織されたとしても、自己活動の段階的な発展は主として生徒を指導し監督する一人一人の教師の能力による。ここでは教授を「個別化」する技術は最も重要である。生徒たちが同じ年齢のクラスまたは同じクラスに所属しているとしても、一人の生徒と他の生徒とは常に理解する能力や作業の速度の点で異なる。それゆえ、ある生徒は教師からのより多くのアドバイスが必要で、他の生徒はより少ないアドバイスで済む。ルソーのよく知られたテーゼ「生徒は科学を習うべきではなく、発見すべきである」は、まさしくスロイドの教室でこそ適用されねばならない。それゆえ、あまりに多く教えることは自己活動の発達の観点からは教師があまりに貧弱なアドバイスしか与えないことよりも有害ですらある。それに対して貧弱なアドバイスは別の理由で欠点となる。同じアドバイスが生徒全員に与えられ、ある生徒にはそれが多すぎ、別の生徒にはそれが少なすぎるような一斉授業は、理論的及び実践的な主体性に生徒を慣れさせることを特別に目的としているスロイド教育においては適用できない。実践性の獲得は確かに記憶の練習によってはできない。「事物から言葉へ、自分の直観や観察から自立した理解へ」というのは近代教育学の合言葉であり、スロイドがおそらく第一に果たすべき使命であろう。

このことは教師によって与えられたアドバイスについても当てはまる。遂行そのものについて教師が生徒によって作られるべき作品に直接手を加えていけないということが共通の法則として定められるべきである。なぜならこれによって生徒が自分自身を信頼せず、他人を信頼することに慣れてしまい、依存することが主体性の場に入ることになる。奇妙なことに生徒の作品に教師自身の巧みさを試す前に多くの教師の手がムズムズするということがあり、このことは特により困難で複雑な練習の場合におこる。生徒たちが作業の遂行の際に援助を受けるべきであった、そのために生徒が自分で作業を遂行しなかったというコメントに対して、教師は義憤をもってそれを拒否するとともに、生徒がどのように作業をすべきかを教師が示したことを容認しようと欲する。「示すこと」が生徒の作品に起こる時、「示すこと」と「援助」の間にある差はきわめてわずかである。それゆえ、その結果は実際に以下のようなになる。おそらく教師はしばしば自分の意思に反して、生徒の代わりに作業のかなり重要な部分を遂行し、そのことがスロイドをすることによって生み出される生徒の発達にとって最も有害なことになる。それゆえ、私は教育的なスロイド教授を行っているすべての教師に、生徒の作品に直接に手を加える誘惑に負けてはいけぬと真面目に忠告する。どのように練習が遂行されるべきかを示すことと目に見えるようにすることは、生徒が作業している木片とは別の木片で常に可能である。こうしたやり方によってのみ労働における主体性は、綺麗に鳴り響く教育学のフレーズとは別のものになり、現実のものになる。

(1890年)